
彼女の森

pinkmint

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の森

【Nコード】

N3575V

【作者名】

pinkmint

【あらすじ】

心を病んだ愛しい恋人と暮らす癒しの森。外の世界のかすかな記憶。二人の世界の絶望と希望をつづるファンタジー。

眠りと呼び声（前書き）

作者の痛恨のミスから、31日、一度投稿した小説を誤って削除してしまいました。

二話目の投稿のやり直しの際、「一話ごとに削除できる」と思い込んで削除するというポカをやってしまったのです。当然小説ごと消えました。

記録したアクセスもせつかくいただいた貴重なご感想もパーです。まことに申し訳ありません。

運営のほうに負担をかけて申し訳ないのですが、再度アップします。なおあらすじとサブタイトルが正確に思い出せないのでもととかわっているかもしれせん。

眠りと呼び声

寝返りを打つ。

寝返りを打った自分に起こされる。

目の前のしどけない皺の曲線の間、身を投げ出しているなめらかな背中が目に入る。背は薄い白い絹に包まれてかすかに波打っている。

ベッドサイドの窓は開放たれていて、夜気が朝の気配にとって変わる瞬間が遠慮なく流れ込もうとしている。くねくねと枝を交差させるそろの木や豊かなクヌギやしいの木々が、薄青い闇の中で朝に向けて何事かをささやき始めようとしている。

もう少し待って、とぼくは口元に指を当てる。薄い白い絹の質感に抱かれて冷たく眠る、その眠りがかすかな声になって聞こえる。耳に向けてでなく、胸に向けて囁いてくるかすかな、吐息のような声。耳を澄ましてもいいけれど答えてはいけないのだ。その細い声の中にあるかなしみをぼくは知っている。答えれば、ぼくが自分の寝返りで起きたように、彼女はその記憶に目を覚まされてしまうだろう。

音楽が聞こえる。いや、ここにきてからずっとそうだ。音楽は森と家とに最初から住んでいて、ほかのことを考えるのをやめると当然のようにあたりを満たす。例えば彼女が水を流す。鈍い金色の蛇口から、赤いタイルの洗面台に向かって水が渦を巻く。排水溝を閉じて、彼女がビーズ玉を落とす。ころん、ころん、ころん。透き通った色を散らしてたくさんの丸が水に踊る。ほら、音楽。

彼女の赤い唇が開いて、細い声が空気に色を付ける。白い頬と透ける細い血管がそれに合わせて震える。触れなくともぼくの指がその感触を知っている、皮膚。彼女自身のもつ肌の感触。存在の感触。それはたぶん、ぞんぶんに冷やした小麦粉に近いのだ。そっと置く

ぼくの指を冷たく包んで沈めて、覆い尽くし、ぼくの周りできしきしと鳴る。やがて静かになり、指は真っ白な闇に閉ざされる。

もうすぐ容赦なく朝は来る。

どこかの世界においてくすることを許している荷物を、また彼女のもとに一日分だけ届けに来る。

見慣れたあの繊細な顔立ちがこちらに向けて露になり、長いまつげに閉ざされた瞳が開くのを、ぼくは何かを畏れるように待つ。彼女はまつしるな記憶の中から現れる。赤ん坊のようにばらいろの頬をして、瞳に明かりを灯して、こちらを見る。その記憶に、その空間に、あずけていた記憶と重みとかなしみが蘇るまでの間、ぼくはひととき懸命に今日の予定を立てて囁く。

おはよう。今日も風が気持ちいいよ。森の中を散歩に行こう。君の姿を見ると駆け下りてくるしまりすたちに、君が干しておいた、掌一杯のかぼちゃの種をあげよう。昨日あのその木の洞から、赤ちやんりすが顔を出すのを見たよ。出たり引っ込んだりして何匹かわからないんだ、でもうまれたことはまちがいない。君の手からあげよう。子りすの体重を君掌で確かめよう。

……ぼくはうまくいえるだろうか。

この森に来てから彼女は自分を語らなくなった。ときおり記憶の発作に襲われるほかは、周りの風景に自分を溶け込ませるようにして風のように暮らしている。時々彼女が開けては閉めてを繰り返している、浮き彫りの花々がからまるあのブリキの箱。あそこにいろんな思い出を入れて、おまじないをかけたのかもしれない。だから今もしぼくがそつと開けても、なかでそのかなしみは知らない形の結晶になっているのかもしれない。

ね、起きたら裏口を開けてみようよ。二日か三日おきに花や果物を置いて行く森の誰かの姿が見えるかもしれない。きみは誰だと思う

？森の獣？ 妖精？ それとも誰かの、何かへの恩返しかな？

彼女のまぶたが震える、
もうすぐ目を開く、もうすぐ。

ああ、ぼくはうまくいえるだろうか。……………

「お身内のかた？」

頭上から声をかけられて、女はゆっくりと目を上げた。

集中治療室から出てきたばかりの若い医師が、口元のマスクを外した。長い間眺めていた床材の小さなひびの残像が、男性医師の顔に重なった。

「みうち……………」

女は自分自身に確認するようにその言葉を繰り返した。

「身内、みうちでは、ないですけど…………… 知り合い……………」消えかかる語尾を捕まえようとするように膝の上の細い指があてもなく蠢く。

「じゃあお身内とか親族の方はいらっしやらないのかな。状況説明がしたいんだけど。あなたはどどういうご関係？」

深夜の病院の廊下を小走りに通る夜勤のナースの足音に、ひっきりなしに遠く近くサイレンの音がからまっている。医師の背後の看護師が低い声で答えた。

「お名前以外、お返事もしてくださらなかったんですよ、そのお嬢さん。遠野、うららさん、よね、ご家族ではないようですね」

「患者は身分を証明するようなものは所持してなかったの」

「ケータイの記録から分かる範囲にはお電話してるんですけどね」

「あの、生きてますか？ 大丈夫ですか？ 生きられますか？」

少年のようなショートヘア、薄汚れた白いシャツとタイトなブラツクのパンツ。切羽詰った大きな瞳が、瞬きもせずに医師にしがみついた。医師は看護師と顔を見合わせた。

「とりあえず顔と足の傷は縫ったよ。足はかなり深く刺されてて、静脈を傷つけてた。到着が少し遅ければ危なかったな。O型の血液がなんとか足りて助かったんですよ。あと化膿とか骨に損傷がなければ手術までしなくとも回復するけれど、どういうわけかなかなか意識が戻らない。そこがちょっと心配かな」

「意識……」

「病歴とか入院歴とか持病とか知りたいんだけど、あなたは知らないんだよね。ご家族の連絡先を知らないかな？」

女は口をわずかに開き、目を泳がせた。

「あの、縁を切ったと言っていましたから、それに、あちらからも切られたと言っていましたから……。入院費なら、わたしが払います。書類も……」

「入院の同意書記入も保証人もお身内の人のほうがいいんだけど、そういう事情じゃなあ。あなたはあの現場にいたんでしょう？ 後から刑事さんが来るかもしれないんだけど、ちゃんと説明できるかな、何があつたか」

「刑事？」

「事情が事情だからね。彼を一とすると相手が三つて喧嘩だったらしいけど、その三のぶんはベッドが無くてうちは受け入れを拒否したんだ。彼は緊急性があつたし」

「警察はやめてください。あのひとは警察は嫌いです」女は震え声で訴えた。

医師はカルテを下ろすと小さく肩をすくめるようにした。ふっと息を吐くと、女の細い肩に手を伸ばしてぽんと叩いた。

「大事な彼にこれだけのことをした人は罰をうけなきゃダメでしょう？」

女はびくりと身をすくめて、そのぼん、の衝撃を振り払うように

した。

廊下の向こうから、ヒールの底を床に叩きつけるような足音が近づいてきた。ピンクのワンピースの長身の女の姿が病棟案内の受付のコーナーを曲がって現れ、こちらを見ると一直線に歩み寄ってきた。

「あの、兄が足を刺されてこちらに運ばれたと連絡を受けたんですけど」

医師はほっとしたように彼女に向き直った。兄、という単語を耳にしたとたん、ショートカットの女はすつと顔を背けた。

「ああ、それは良かった。とりあえずこれまでの経過を説明しますね。色々とお手続きがあるんですが、お願いできますか」

ひと通り説明を聞くと、彼女は座っている女を一蔑もせず、看護師から書類を受け取り、近くの外来窓口の無人のカウンターで署名捺印した。処置が済んだら空いている病室に移します、準個室しか空いていないのですがよろしいですか。はい、よろしく願います。確認しておきますが、病院側のご都合で個室となった場合には差額は要求されませんよね？ はい、そのとおりです。後で会計の方にご確認ください。そんな会話が早口でやり取りされ、医師と看護師はさっさと廊下を去っていった。

夜更けのベンチに、顔を背けあつた女二人が残された。

ピンクの女はがさごそと鞆の中身を探るようにながら、独りごとのように言った。

「……その服、早めに着替えたほうがいいわ」

「え？」

「兄の血でしょ、それ」

女は変色した染みがまだらに乾いている自分の胸元を見た。両手に抱えていた彼の体の生暖かい重みと血の感触が蘇り、思わずぶるりと身を震わせた。

「一応聞くけど、あなたがやったんじゃないのよね」
「違います！」

廊下に響く大きな声に動じることなく、ピンクの女は淡々と続けた。

「それはごめんなさい。同棲中の彼女に散々暴力を振るわれてるって悲惨な話ばかり、両親から聞かされたものだから」

シャツの胸元を握り締めて、女は唇をかみしめた。

「もう、しません」

細い声が芯から震えていた。

「……それは無理じゃない」

「しません。もう、絶対に」

気詰まりな沈黙のなかに、また近づいてくるサイレンの音が入り来む。

「いきなりそんな約束ができるぐらいなら、もっと早くにやめられていたはずよね。でも、できなかつたんでしょ。今まで」

「……」

鞆から鮮やかなばら色のパッケージの煙草を取り出すと、Lad yというロゴを眺めながら女は言った。

「わたしたち、顔を合わせるのは初めてよね。いつかごあいさつしたいと思っていたの。わたしは五島祥子。兄がいつもお世話になってます。あなたは、うららさん…… 遠野麗さん、でいいんですよね？」後藤祥子は初めて真っ向から隣の女の顔を見据えた。

「……わたし」

搾り出すようにいうと、遠野麗は口元を震える両手で覆うようにした。祥子は微妙に視線をそらせながら淡々と続けた。

「わたしは兄が好きだから、もちろん、一刻も早く治って欲しいと思ってるの。でも、本当にそれを望んでいいのか、いま、わからない。回復して同棲中の家に戻って、またあなたに同じような目にあわされるぐらいなら、今のまま眠っている方が一番平和なんじゃないかって。どうしてもそう、考えてしまうの。どうしても兄がそんな

理不尽な暴力に耐えているのか、正直わからないわ。ここに来るのはいいんだけど、あなたに逢うのはなんだか、怖かった」

左手で右手の震えを抑えるようにすると、遠野麗は長いことただ黙っていた。祥子も黙っていた。やがて、麗は自分の両手に目を落としましたまま、かすれ声で言った。

「わからなくて、いいです。」

全部、……たぶん、わたしが……馬鹿だからおきたことで、全部わたしが悪いんです、それでかまいません。

彼について、眠り続けているほうがましと思うなら、どうぞそう祈っていてください。でも、わたしはあなたに何ひとつ、ひとつも謝る気はありません。これはそういう問題じゃないから」

祥子は麗の横顔をじっと見ると、やがてため息交じりにかすかに笑った。

「少し喫煙ブースに付き合ってくれないかしら。何が起きたかだけ、説明してほしいの」

「お話したくありません」

即答するかたくなな声色に、祥子は柔らかな口調をかぶせた。

「あのね、あなたにはかなわないかもしれないけれど、わたしだって家族として兄のことを大事に思ってるのよ。」

両親は頑固に兄との接触を拒否してるけれど、わたしは基本的に兄の味方でありたいと思ってるの。だから、今回の事件について、本当のことを知っておきたいの。

やっと顔が見られるのよ。あなたと出会って兄が家族と縁を切って、二年たって、やっと。

この通り、遠野さん、お願い」

祥子は麗に向かって深々と頭を下げた。麗は祥子のセミロングの巻き毛を見つめ、そしてきゅっとかたちのいい唇を結んだ。

「大きな人形が置いてあるのかと思った、ベンチに」

「そんな感じでしたよね」

手を洗う医師のそばで看護師は答えた。

「それも、壊れたお人形。あのかた、大丈夫かしら」

「うーん、死んだかもって聞いてたんだよね。……というか、まあ、生きててよかった」

「誰がですか？」

「女優さんだったはずだよ、あの子」医師は答えた。

若い看護師が割って入った。

「廊下のヒトですよね？ ちょっと目立つぐらい綺麗なお嬢さんですよ。やっぱり芸能人なんですか。で、死んだと思われてる人？」

「こういう話題だとすぐ入ってくる、あなたは」

「看護婦長こそ、その先お聞きになりたいでしょう」

「いいえ、こういう話はよしたほうがいいわ」

若い看護師はつまらなそうな顔をした。

「ま、失言だったな。でも、ぼくの推測通りなら、もし警察が来たらいろいろいやな思いするかもしれないね。大丈夫かな」医師は力ルテを見直すと、婦長に告げた。

「準個室の用意はできてる？」

「電動ベッドが不調で、取り替えています」

「準備できたら、患者を移しといて。意識が戻るまでなるべく目を離さないようにして」

叫びとせせき

がちゃん、と裏口の白いドアをあけると、両手に栗を抱えた幼い少年のびっくりした顔が目に入った。

小さな両手からころころと栗が零れ落ちる。4、5才だろうか。

「きみは、ごんぎつねかな？」

薄い色の髪が午前の木漏れ日に透けている。少年の大きな瞳は、どこか彼女に似ていた。

「おとといはお花だったよね。あれはなんていう花だったの？」

少年はかがんで栗を下ろすと、じりじりと後ずさった。ぼくはそつと右手を上げると、掌を彼に向け、声を潜めた。

「待って。……待ってくれよ。いちど話があったんだ。逃げないで。どこの子かな、この近く？ どこかで会ったつけ？」

少年はさらさらした髪を振った。

「じゃあ、彼女にどこかで会ったんだね。きみのくれたお花を、とても喜んでうちのあちこちに生けていたよ。とても部屋が華やかになったよ。見ていかない？」

少年はそつと背伸びをして部屋の中を覗くようにした。

「彼女を呼びたいんだけど、まだ眠ってるんだ。なかなか目を覚まさないんだ。ちょっと心配になるくらい。きみは眠りは深いほう？
どんな夢を見る？」

立て続けにしゃべる。裏庭の木々がくすぐったそうにおかしそうに身をよじっている。笑えばいいさ。でも、やっとあの裏庭のプレゼントの主に逢えたんだ、離すものが。

「おうたをね」

「うん？」

「おうたを、うたつてくれたの」

ぼくは頷いた。

「そうか、おうたか。いつ聞いたの？ どんなうただった？」

少年は少し首をかしげるようにすると、小さな声で口ずさんだ。らららら、らららら。ららららら、らららら。

「わかった。それは、星に願いを、だね」 ぼくは思わず微笑んだ。

「ぼくが初めて会ったときも、それを歌っていたよ」

少年もにっこり微笑んだ。

「その綺麗な声を聴いて、ぼくは彼女が好きになった。きみも、そうかな？」

少年はこっくりとうなずいた。

「泣いていたらね」

「うん？」

「泣いていたら、うたってくれたの」

「そうか、泣いてたんだ。森で迷子にでもなった？ そして彼女にあっただのかな？」

「ひとりぼっちで、早く会いたくて」

「誰に？」

「ママと、パパに」

「じゃ、やっぱり迷子か」

少年は後ろを振り向いた。

「いかなくちや」

「ママとパパが待ってるんだね」

「はやくきてって、伝えて」

「誰に？」

「ママに」

「え？」

「ぼく、もうこない」

少年はくるりと背を向けるとりすのように走り出した。

「ちよつと、きみ！」

そろが、しいが、えんじゅが、にわとこが、しやらしやらしやらしやらと笑いながら身をゆすって、たちまち少年の姿を隠した。森は光と影の綾織りの向こうに気配を閉じ込めて、また素知らぬ顔に

戻った。

気が付くと、裸足で裏庭に立っていた。

足元で、垂れ耳の飼い犬の小桃が、尻尾を振って僕を見上げていた。栗が、裏口から森にかけて点々と散らばり、緑の日差しにきらきらと光っている。ぼくは頭上の木を見上げた。そして森の奥を見やっ

つた。森の木々は一点透視に見えるときもあり、多点透視に見えるときもある。多点透視に見えるのは疲れているときだ。そんな時の森の無慈悲な広がり、闇のむこうはまた闇だぞと、お前は終世ここから出られないのだぞと脅してくるようだ。いつたいこの森の外の世界を思い出すことはあるのか？ お前はどこから来て、どこへ行くのか。考えなくていいのか？ 思い出さなくていいのか？

ふと、足が痛んだ。太腿の上のあたり。けがをした覚えはない、なのに重苦しく、時に鋭く、足が痛い。これはなんだろう。いつから痛いんだっけ？

そのとき、視界の端を白い姿が駆け抜けた。しまった！

白いすんとしたナイトウェアのすそを花卉のように広げて、足音もなくぼくの脇をすり抜け、斜めに木漏れ日のさす森へ彼女は走りこんでゆく。木々は身を震わせて木の葉を散らし、彼女の姿をぼくの視界から隠そうとする。小桃が飛び上がるようにすると、わんわんと甲高い声で吠えて彼女の後を追った。

「うらら、待て、走るな！」

ぼくは叫んで駆け出した。

ドアを開けたままにしていたせいだ。いつもこうなのに。もう元気ありがとう、おかげですっかり大丈夫、と笑っていた次の瞬間に刃物を持ち出す。眠っていたと思っただらいきなり走り出す。いつもそばにいてとせがむのに、一刻を惜しむかのようにぼくの目の前から消えようとする。抱きしめてと繰り返しせがんだ直後にお前なんか死んでしまえとすごい勢いで物をぶつけてくる。彼女の行動はいつ

も予測がつかない。一瞬一瞬が繋がらない。ドアを開けていては
けなかったのだ。

「走るな、頼む、走るな！」

ああ、昔こんな風にしてぼくの前を走り抜けた命がある。

まだ幼い、無垢な命だった。ぼくは止められなかった。もうやめて
くれ、もう行かないでくれ。森はいつだって彼女の味方で、天使の
はしごと呼ばれる斜めの光線を天から簾のようにおろし、森の木々
で分裂させて、光と影の目くらましをかけてくる。ちらちらち
らと風景がハレーションを起こし、動いているものと動いていない
ものとの境すらあいまいにする。生きているものと生きていないも
の。いまほんとうにここにあるものと、ないもの。手に入れたもの、
取り戻せないもの……

気が付くと、目の前に彼女がいた。立ち止まって、不思議そうにぼ
くを見ている。足元に小桃がじゃれついている。初めて森の中でオ
オカミという生物にあった赤ずきんのような顔をしている。ゆっく
り近寄ると、すっと手を伸ばしてきた。手の甲が、ぼくの頬に触れ
た。ぼくはされるままになっていた。そのまま手の甲でぼくの頬を
撫で上げると、今度は掌で頬に触れてきた。左手が添えられた。彼
女は両手でぼくの頬を包んだ。

「どうして、泣いているの？」

他人事のように彼女は言った。

オオカミは赤ずきんの手を取った。

そして彼女の細い腰を抱き寄せると、背中に手を回し、思い切り抱
きしめた。

しばらく嗚咽が止まらなかった。彼女の掌が、やさしくぼくの背を
さすった。泣かないの、もう、泣かないのよ。わたしはここに
いるわ。暖かい日差しのような、小さな声が聞こえた。

それからゆっくりと、二人と一匹で、森の中を歩いた。

「両親は再婚同士だったんだ」

問わず語りにぼくは話し始めた。

「実母の記憶はない。父のところに来た若い女性には二人連れ子がいた。ひとりにはぼくより二つ年下の気の強い女の子。もうひとは四歳年下の少し頭の弱い男の子。この子は苛められっ子で、いくらいじめられても相手に遊んでもらおうとなつてゆくんだ。そしてまた苛められる。ぼくはかなり人望の厚かったほうでしかもガキ大将で、周り中から小突かれてもニコニコしてる弟が恥ずかしくてもようがなかった。でも、いいおにいちゃんができてよかつたわねえ、よろしくねとか新しい母に言われて、まあ一応いいかつこしたんだよ。そしたら、捨て犬みたいにまとわりつかれて、もう正直嫌気がさしたんだ」

くいながキュッキュツと鳴きながら青灰色の腹を見せて頭上を追い越して行つた。うらがが手を伸ばして軌跡をつかもうとした。

「ぼくは六年生で、あいつは二年生だった。休み時間もほつといてくれない。組の仲間と遊ぼうとしても兄ちゃん兄ちゃんて強引に入ってくる。かくれんぼや缶けりであいつを撒いて放置して帰ったことも何度もある。でもあいつはいつまでも待つてるんだ、いつまでもいつまでも。馬鹿だから」

森の中ほどに少し広い場所があつて、木々の陰りも薄く、枝えだの間から空の光が見えた。横たわつた丸太を削つてぼくがベンチにしたやつが転がっていた。二人並んでそこに腰掛けた。小桃はぼくらの足元で丸くなった。

「何かもう我慢ならなくなつてたんだと思う。そのころ縦割りチームとか言つて、上級生が下級生の面倒を見るために編成された班ごとに、夏季教室が開かれてた。ぼくとあいつは同じ班だった。プール付きの施設で、水泳の時間もあつた。ふざけあいつこのふりをして、弟はプールでみんなにいじめられてた。おまえの弟、おぼれてるぞと友人に言われて、いやただふざけてるんだよと無視をした。自分のことぐらいいい加減自分で何とかしろよと、そう思つて知ら

ん顔してた。恥ずかしかったんだ、あいつが。あいつはぼくのほうを見ていた、ずっと。

最後の日、丘上の公園でキャンプファイヤーが予定されていた。その準備の最中、あいつがフラツと立ち上がって、ぼくのほうに来たんだ」

あさつてのほうを向いていると思っていた彼女は、いつの間にかぼくの顔を見つめていた。ぼくは戸惑って一瞬唾をのみ、また話し始めた。

「何か言われると思って一瞬身構えた。でもあいつはぼくのほうを見ないでそのまま脇を走り抜けた。そのとき、小さな声が聞こえたんだ。

兄ちゃん、さよなら。

ぼくはぎよつとして弟のいく先をみた。高台の展望台の手すりを身軽に乗り越えて、そのまま弟の姿は空に消えた。一瞬、自分が何を見たのかわからなかった。近くにいた女子が悲鳴を上げた。人がどんどん手すりのほうに走って行った。ぼくは行けなかった」

彼女はじつとぼくを見ている。

「弟の死を聞いて、母は半狂乱になった。学校側からの説明にも納得しなかった。いじめのことは誰も口にできなかった、ほとんどが面白半分の加害者だったからね。

どうしてなの、どうしてなのと叫び続けた母に、ぼくは何も言わなかった。葬式でも泣けなかった。あなただけがあの子にやさしかったのよね、ありがとう、と母に言われて、涙が凍りついた。

生きている資格なんてない、ぼくにはその資格がないと、あの言葉の記憶がずっとささやきつづけるんだ。

あいつが走り抜けたとき、ぼくは弟の手をつかまなかった」

うららは目をそらした。しばらく前を見たのち、ささやくように言った。

「わたしは、なおきの、記憶の中の、その子なの？」

ぼくはうららの手をそつとつかんだ。

「きみはきみだよ、ほかの誰でもない。きみに会ったその瞬間から、ぼくはきみしか見えなくなった。」

いつかこれが話せる相手に出逢えたらと思つてた、それがきみなんだ。迷惑だつたら謝る。でも、ぼくにも誰か、誰かが必要だつたんだ。

足がまた痛んだ。ぼくは顔をしかめた。上のほうから、誰かに呼ばれた気がする。木々の間を抜けて、ぼくの名を呼ぶ声にならない声が反響する。ぼくは頭を巡らせて樹上を見ようとした。うらはは手を上げて、ぼくの両耳を軽く塞ぐようにした。そして、顔を近づけてささやいた。

「なおき、どこにもいかないでね。ここにいて。何も聞かないで、お願い。ここにこのままいきましょう、ずっとふたりで」

「きみはあの子を見た？」

「誰？」

「裏口に花や果物や、いろんなものをおいていつてた子。ぼくはひよつとして弟だつたらいいと思つてた、そうさ、なんて都合がいいんだ。」

でも違つてた。親とはくれた子どもだつた。いや、弟だつたのかな。もう、よくわからない。

待っているとママに伝えて、と言われたんだけど、あの子のママなんて知らない。だから伝えられない。きみの歌を聴いたと言つていたよ、きみにも合わせたかつたな。

きみは迷子の子どもに歌を歌つて慰めてあげたことはある？」

「あるわ」

彼女は小さく微笑んで答えた。

「いま、目の前にいるわ」

夜更けの屋上からは、わずかな街の灯りと、高速道路のオレンジの灯りのうねりが見渡せる。ごうごう、しゅうしゅうという車の音が麗の耳にもかすかに届いた。金網にジグザグに区切られた風景に顔を寄せると、隣で祥子も同じようにした。

「あの騒ぎでも、起きてくれなかったわね」

祥子は遠景に視線を投げたまま、つぶやいた。

二人で喫煙室に向かおうとしたそのとき、彼は集中治療室から出てきた。瞼はぴたりと閉じたままだった。麗は走り寄って、小さな声で名前を呼んだ。なおき、なおき、なおき。看護師が、点滴台をつかもうとする麗を制した。大丈夫ですから、朝にはきつと目覚めますから、そんなに呼ばないで。起きないのは、今は眠る必要があるからですよ。体って、にんげんって、そういう風にできてるんですから。

病室でも、彼はびくともしなかった。

なおき、夢を見てるの？ 何の夢を見てるの？ わたしはそこには入れないの？ どうしてこっちにきてくれないの？

なにかのたがが外れたように、麗は考えていることを口に出して呟きつづけた。しばらく離れて彼女を見ていた祥子の背後に人の気配がして、ふり向くと、制服の警官が二人と、目つきの鋭い私服の男がひとり、戸口に現れた。

「現場にいらした方は、そのかたですか？ ちょっとお話がうかがいたいんですが」私服の刑事が野太い声を出した。

祥子は麗を振り返った。彼女は首を子どものように左右に振ると、怯えた目をして窓のほうに後ずさった。

「ちょっとだけです。お嬢さん、あなたはお身内ではないんですよね？」

麗は答えなかった。代りに祥子が声を上げた。

「身内はわたしです、五島の妹です。現場にはいませんでした。その方は兄の知り合いで付き添っていらしたんですが、あの、あまり

……」

「帰って」麗が切羽詰まった声を出した。刑事はできる限りの優しい表情を作って話しかけた。

「現場で一応の聞き取りはしたんですよ。近所のかたに呼ばれたんで一応ね。現場だけがをしていた三人の誰も、被害届は出さないと言ってます。顔見知りの小競り合いだ。だからもし、五島さんご自身も被害届を出さないとすれば、大したことにはならないんですよ。でも、五島さんのお怪我が一番ひどいのでね。意識がないということなので、いちおう付添いのあなたに、当時の様子をきちんとお聞きしたいと思って」

「いやです。帰って」

麗は片手で尚輝の手を握り、もう片方の手でベッドの柵を握りしめていた。

「じゃあここで、簡単に聞くから答えてください。あなたはどうしてもあそこにいたんですか？ 最初から一緒にいた？」

「麗さん、話したほうがいいわ。ちゃんと話せばそれで帰ってもらえるわよ」祥子が口を挿んだ。

「その通りですよ」制服の警官が微笑みながら答えた。

「わたしを見ないで」

麗の異常な様子に気づいたようで、刑事は声を落として答えた。

「わかりました、じゃあ見ませんよ。答えてくれますか？ 最初から一緒にいたか？」

「最初からではありません」

「じゃあどうしてあそこに？」

麗は呼吸を整えると、下を向いたまま答えた。

「彼が、帰ってこなくて、連絡が取れなくて、探していたら、電話があつて」

「誰から？」

「わかりません…… 友だち、かも」

「彼の友だち？ どういう電話？」

「住所を言っつて、彼がトラブルに巻き込まれているかもと、切れました。それでそこに行きました」

「ふーん？」

刑事のそばで警官が忙しくメモをしていた。

「行ったら、喧嘩してた？」

「もう、そのときは、……倒れて、いました」

「彼はどんな様子だった？」

「頬を切られてて、足が、……太ももの当たりが血だらけで、何かで縛ってあつて、呼んでも、返事がなくて」麗の呼吸がはやくなつた。

「相手もみんな倒れてた？」

「はい」

「あなたの知つた顔はいなかったかな。全然知らない人？」

「……」

「知らない人たちだった？」

倒れている彼にすがりついた次の瞬間、隣でうずくまっている大きな体に気が付いた。何を忘れても、そいつのにおいを知っている。体臭と、記憶。そいつにされたことを全身が覚えている。飛び上がり、悲鳴を上げて逃げ出しそうになった。でもできない、彼をおいてなんていけない。そんなことをするぐらいなら死んだほうがいい。必死で彼の体を引っ張った。遠くへ、ここから離れて遠くへ。悪夢の向こうへ。誰が助けしてくれるだろう、どこまで運べばいいんだろう？ 涙があふれ、悲鳴は口の中で反響した。助けて、誰か助けて。

「どうしました？ やっぱり知っている人だったの？」

麗は顔を上げた。そして両手で口を塞いだ。重力を失った空間で、自分の髪の毛が巻き上げられていくのがわかる。息ができない。息が……

突然、深夜の病棟に切り裂くような女性の悲鳴が響いた。看護婦詰所から夜勤の看護師が飛び出してきた。悲鳴は切れ切れに続き、鳥の雄叫びのように廊下のガラス窓を震わせた。患者の半数がたたき起こされ、廊下に数人が顔を出した。

当直室から顔をだし、白衣を羽織る医師に、駆け付けた看護師が声をかけた。

「あの怪我人の付添いのかたです。先生、来てください」

廊下にはこだまのように同じ声が反響していた。いや、いや、いや、いや。

該当の病室に駆け付けたとき、警官ら三人は廊下に出され、体の大きな男性看護師が麗の小柄な体を押さえつけていた。その両手の中で彼女はますます半狂乱になっていた。医師は背後から咎めるような声をかけた。

「ああ、その人はそれじゃだめだ。警官の方たちはひとまず面談室のほうへ。」

で、きみ。男性じゃだめだ、女性の看護師に変わってあげて。っていうか、あ

の、五島さんの妹さん」

「はい」

部屋の隅でつつ立ったまま、緊張した顔で祥子が答えた。

「押さえつけるのをやめれば落ち着くだろう。きみはそばで手を握っててあげて。それでいいから」

男性看護師が体を離すと、麗は床に崩れた。祥子はかがんで麗の背をさすった。

「鎮静剤打ちますか？」若い看護師が声を潜めて尋ねた。

「針なんて持ち出しても興奮に拍車をかけるだけだよ。とりあえずリーゼあたりを処方してあげて。あとここから関係ない全員が出てあげればいい。あとね、私から説明しますから、刑事さん」

レントゲン用のモニターが並ぶ面談室で、若い医師の前に警官ら三

人が神妙に着席していた。

「ということなので、彼の意識が回復したらご連絡しますから、それまではそつとしいてもらえませんか。本人に聞けばいいでしょう」

刑事は頭をがりがりと掻くと、いやあ、と言った。

「聞いたことはあつたけどね、あの事件の被害者か。A V 嬢連続リンチ殺、いや、殺されてるのはいなかったっけ、いたっけ」

「内容的にはスナッフビデオに近いですよ、あの社のは」制服の警官が小声で答えた。

「訴え出たのは全体の三分の一とも言われてて、訴え出でない中には命を落としたのもいると言われているけどね。内容が内容だけに、裁判沙汰になると身内の恥扱いされるから。その三分の二の一人か、あの子が」刑事は煙草を取り出そうとしておつとと呟き、そして鞆にしまった。

「二年前、僕のところにもひとり女優さんが運ばれてきたんですよ。その子はアルコール・薬物系でひどい状態にされてね、急性で危なかった。で、一人、自分よりひどい目にあつた子がいるって、とても心配だつて言つてたんです。

自殺したつて噂もあると言つていて、ぼくはその名前と彼女の話しの特徴を覚えてたんですよ」医師はカルテをぱらぱらめくりながら語つた。

「ああいうのの被害者になるのは、親とのつながりが薄い子が、不幸な家の子が多いんだよね。怪我した彼は、どうも建築士だとかいう話だが、なんでも某代議士の息子さんだとかでね」刑事はメモ帳をペンで叩いた。

「まあ、親の職業はどうでもいいんだけどね。どこで彼女と接点があつたんだろう。恋つてのは難儀で唐突なもんだからねえ」

「だいぶ精神的にやられてますよね、彼女。事件からかれこれもう二年ですよ、ね？」若い警官がドアのほうを振り返りながら言った。同じ方向を見ながら医師は答えた。

「あれだけの目に遭えば、トラウマはほとんど一生ものですよ。彼はそばでそれを見続けてきたんでしょうね」

「まあ、当の本人が目覚めて被害届を出さないと主張するなら我々の仕事もそこまでですが」刑事はメモ帳を閉じた。

「長い戦いになるね、あの子も、彼氏も」

星に願いを

Lady Rose のパッケージから細い煙草を取り出すと、祥子は銀のライターで火をつけた。じじじじ、と音を立てて上がる煙が、屋上の強い風に吹かれてななめに飛び去ってゆく。

「少しは落ち着いた？」

麗は金網に手をかけたまま黙っていた。バラの香りの煙が、ささくれた心に不思議にしみこんで、今まで知らない苦い安らぎを灯していた。

「兄は今でもタバコ吸ってる？」

麗は首を振った。

「そうか、あなたのためにやめたのね。結構苦勞してたのに、大したもんだわ」

麗から顔をそむけて、風下に煙を吐きだした。

「なんかちよつといいことばかり言っただけだね、正直、兄貴は横柄な奴だったわよ。最初、そう思ったの。わたしたち連れ子同士でね、母に連れられてあの家に行ったとき、明らかに迷惑そうな顔してたしと、二つ下の弟を見てたわ。

体も大きかったし、口も乱暴で、少しは遠慮つてものをすればいいのにね、人のハハオヤの作った食事に堂々と文句垂れるの。まだ家族になりたてなのに、自分のものは自分で片付けるよ、とか、わたしにもうるさくいつてくるし。

でもね、おいしいときはすごい勢いで食べるのよ。で、ごちそうさま、またこれ食いたい、とか。ずるいでしょ。母もそんなときは嬉しそうだった」

祥子は風に巻き上げられる茶色の巻き毛を片手で抑えた。

「弟は少し発達障害があつて、周り中に馬鹿にされてきたのよ。でも結構いいお兄ちゃんしてくれてね、辛抱強くあの子の遊び相手をしてくれてたわ。それで弟もすぐくなつてた。でも二年生の夏、

夏季教室で不幸な事故死をしちゃってね。そのことで責任を感じたのか、ものすごく落ち込んで、性格まで変わったように見えただわ。この話、聞いたことある？」

「知ってます」

麗は短く答えた。そう、と行って祥子は少し黙った。

「初めて見るぐらい弱気になって、口数も半分ぐらいになって。だから高校生になったあたりからまた横柄になり始めたときはほっとしたぐらいよ。勉強は抜群にできたからよく教えてもらったけど、こんなことも分らないのかってすぐバカにするの。だから、その態度を改めない限り絶対もてないからねって言ってやったんだけど」話しながら祥子は微笑んでいた。

「それでもね、抜群にいい女にもててくれればいい、そしたらあきらめようと思ってたのよ」

「なおきが、好きなの？」静かな声で麗は言った。

「ええ、ずっと好きだった。きつとあなたとおなじぐらい、彼を素敵だと思ってる」

そしてひと呼吸置くと、決心したように声音を改めて語りだした。

「あなたについては噂で知ってた。元AV嬢で実写暴力ビデオ事件の被害者。わたしは、両親が激怒しようと思っとうと兄の側に立つ決心してたのよ。だから詳しく事件のことを調べたの。で……」唇をすぼめて、音の出そうな勢いで薔薇の香りの煙を吸い込む。

「生まれてからこれまで、これほどいやな思いをしたことはなかったわ。」

寝ても覚めても、知ったことが刃物になってわたしを襲った」

何人もの男たちに凌辱され、その手で何度もプールに突っ込まれる顔、蘇生させては泣き叫ぶ女性を水に落とす残酷な映像が蘇って、祥子はぶるりと全身を震わせた。

「……そして思ったの。心の傷が生きていけなくなるぐらい深いものだった場合、体も滅びてしまうなら、あなたは生きてはいなかっただろうって。そのほうがよかつたんじゃないか、どうしてそうじ

やないんだらう。兄はどうしてあなたのことを知ってしまったんだらう」

隣で麗は、目を伏せたまま両手を金網に食い込ませ、唇をかみしめていた。

「世の中には大雑把に分けて二種類の人間がいると思う。そういう事件を知ってもああそうか、でまた普通の日常に戻れる人と、いつまでもいつまでも自分のことのように血を流さずにはいられない人兄は明らかに後者なのよ、弟の件でも、人格が変わるぐらい悩んでいたから。」

あなたを知って、あなたに心を寄せて、あなたを守ると決心しても、あなたの傷を救える人なんているわけがない。そうでしょう。愛されても守られても、あなたは兄を男という人種すべての代わりに攻撃し続けてるんですよ。

でも結局あなたが自分で会社と契約して、出ると決めたから起きたことよね。契約内容に騙されたと言っても、結局はあなたの落ち度でしょう。そんなことでどうしてまともに生きてる人間が傷つかないやならないの。どうしてわたしの大事な人が、そんなことで苦しめられなくちゃならないの」

大きく目を見開いて足元を見ながら、麗は表情をなくしていった。その風情は、生きたまま、ひとが足元から蠟人形に変身してゆくかのようなだった。

「兄貴がここにいたら、わたしは殴り殺されてるわね。でもわたしは兄貴に幸せになつてほしかった。どんな祝福されない結婚でもいい、相手の人が彼をしあわせにしてくれるなら、わたしは祝福したと思う。でも、あなたは違うじゃない。あなたは生きている限り、兄の幸せを吸い取り続けるのよ」

名指し難しい乱暴な感情があとからあとから湧き上がり、祥子は自分を止めることができなくなっていた。いまどうして、彼女にそんなひどいことが言えるのか自分でもわからない。この眼前の女性を地獄に落としたのは彼女の愚かさだけではないはずだ。けれど、かた

ちも姿も見せることのないその相手は、闇とも光とも融合して、薄く広くこの広い世界になじんでいる。彼らは決して苦しまないし、涙も流さない。世界は彼らを歓迎し、呑み込んで、この夜景とともに醜く鮮やかに揺蕩っているのだ。

ばりばりばりというバイクの轟音が、高速道路の光の列の彼方から響いてきた。そして遠ざかるにつれ、轟音は切なく悲しい何か、別れの音楽のようになった。

いつの間にか自分が言葉を放置して黙っているのに祥子は気づいた。音が消えかかるころ、麗のか細い声が隣から流れてきた。

「わたしも、なんども、………思いました。

わたしなんて、あのとき、水の中で死んでいればよかった。そうしたらもうあの時以上に苦しむこともなかったし、彼の家族も悩まなかったし、祥子さんも、彼も………」

麗は呼吸を荒くしてしばらく黙った。そして自らを励ますように上を向くと、また語りだした。

「………でも、死ねないの。彼と出会って、言われたの。辛いだろうけど生きてくれ、俺のために生きてくれって。他に理由なんか考えなくていい、わがままな俺のために生きてくれ。

君の都合なんて考えずに頼むけど、生きてくれって」

長くしゃべると、最後のセンテンスの終りのほうは、かすれてか細く震えた。

「この世が地獄でも、辛いことだらけでも、俺がみんな受け止めるから、自分を傷つけるぐらいなら俺を傷つけて、そうして生きてくれ。」

俺は君に残酷なことを言っているんだ、それは知ってる、でも俺も君のために苦しんで生きるからどうか許してくれって」

「………」

麗の透明な声は、夜空に投げ上げられるガラス玉のようだと祥子は

思った。その色彩はなにか太刀打ちできない音楽のように心の中に分け行つて、手に余る感情を引き出そうとしていた。

「祥子さん、だから、もし彼がこのまま死ぬようなことがあったら、わたしを止めないでね。わたしの人生にその先がないのは、唯一の救いなの。でも、彼が生きるならわたしも生きる。彼を生かすために、わたしも生きる。」

そのことで、どうかわたしを責めないで」

唇を閉じると同時に、大粒の涙が麗の白い頬を転がり落ちた。

祥子はポケットから携帯灰皿を取り出すと薔薇の香りのタバコをにじり消した。そして、血の出そうな勢いで金網を指に食い込ませている麗の細い指を、そつとほどこいて網から外した。

「……兄貴は、あなたのために戦ったの？」
麗の細い指を握りながら聞く。

「……」

顎から涙を滴らせたまま、麗は頷いた。

「兄貴の打ち倒した相手は、そうされて当然の連中だったのね？」
小さな頭が、また同じように頷いた。

「……そうか」

しばらく口を押えたのち、祥子は語りだした。

「たぶん、これから先、どんなひどいことを他人に言われることがあっても、今のわたしよりはましだと思いますわ。だから今聞いたことは覚えていたほうがいいわよ。」

今日のことでもわかったでしょう。あなたの最愛のひと、五島尚輝のその妹は、

感情のままに弱った人に追い打ちをかけるようなことが平気で言える、最低の人間よ」

唇をかみしめて言葉を切ると、祥子は言葉を続けた。

「だから、ね。五島祥子がどんな嫌がらせを言おうと、どんなに大事な兄を返せと罵ろうと、あなたは何ひとつ後ろめたく思うことはないのよ。だってわたしはなんだかんだいっても兄貴がいなくても

生きていけるもの。せいぜいその程度のしょうもない、身勝手なにんげんだもの」

祥子は麗を見た。悲しみからか怒りからなのか、白い頬が上気したようにうつすらとばら色に染まっていた。

「あれだけのことをいっつといて、こういうのもなんだけど、あなたに死なれちゃ困るわ、麗さん。兄貴のいのちのために、くるしくても、あなたは死んじゃだめよ」

小さな子供のように、赤い目をして麗はまた頷いた。

祥子はじつと、麗の人形のような顔立ちと、濡れた瞳を見ていた。

つかんでいた麗の手を離すと、祥子は神妙な風情で言った。

「あのね、お願いがあるの。あなたを、抱きしめてさせてくれない？」

「えっ？」

麗は戸惑った様子で祥子を見た。

「同情とか友情とかじゃないのよ。ただ、兄貴の感触を知りたいの。あなたを愛している兄貴の感じている、あなたの感触を」

「……………」

抵抗しないのをいいことに、大柄な祥子は両腕でそつと麗の細い体を包み、そのまま体に抱き込んだ。

力を入れると、華奢な体が折れてくだけてしまいきりだつた。どこまでも細い麗の体は、生まれて間もない鳥のようにあたたかく、はかなかつた。

石鹸のささやかな香りが、ふわりとした甘い体臭と混ざり合う。二つの優しい胸のふくらみは、ひだまりにふくらむすずめのようにいとしく小さかつた。看護師の腕の中で暴れたのは正反対に、麗の細い指がそつと祥子の背に添えられた。

そのとき、兄の思いが体の内側から押し寄せてくるような気がした。それは何の理由も動機もいらない、ただ、ひとつの命を、ひとつの体を、ひとつの魂を心から愛しいと思う、涙に似た衝動だつた。

不思議な旋律が彼女のなかに棲んでいた。
旋律は例えば風や月や記憶や香りといったものと同様に、形もなく
祥子をいきなり包み込み、自分が一番弱く一番切ない想いとらわ
れていた迷子のような時期に時間を戻して、ささやきかけるようだ
った。

あなたがひとりなら、歌ってあげる……

「目が覚めそうですね」

五島尚輝の点滴をとりかえながら、看護師が、そばで見っていた医師
に言った。

「さつきから瞼が動いていますし、ほら、指も」

「五島さん、聞こえますか？ 五島さん」医師は大きな声で呼んだ。

「聞こえたら、指を握って」

尚輝の呼吸がはやくなった。首がゆっくり左右に揺れる。

「あの二人はどこへ行ったのかな。呼んであげたほうがいいな」

「探してきます」

看護師は廊下へ駆け出した。

列車は鉄橋に差し掛かっていた。

ががながん、ががながん、という耳をつんざくような音が空間
を満たす。

そのががながんの中に、誰かの呼び声が混じっているような気が
してぼくは顔を上げた。

「聞こえた？」

「なにが？」

向かいの席で顔を伏せたまま、麗はドライフルーツを混ぜていた。
バナナ、マンゴー、クランベリー、いちじく。花のついた麦わらの

帽子が、彼女の白い顔に網目模様の影を落としていた。隣の籐製のペットケージの窓から、丸くなって眠っている小桃が見える。

「なんで今そこで混ぜるの」ぼくが尋ねると

「おやつにしたいフルーツのタッパーを、端から急いで放り込んできたから。これを入れるための壺も買ってあったの」答えになっっているよな、なっていないような返事だった。

全部混ぜ終わると、麗は大きな透明な壺を振ってにっこり笑ってみせた。

「きれいでしょ」

「ああ、きれいだね。シリアルに混ぜるといいね」

「シリアルには混ぜないの。おやつにするのよ」

鮮やかなドライフルーツたちの中から、バナナチップをつまむと、かりつと前歯で噛んだ。その音を聞いて、ぼくはなんだか、身が震えるほど幸福だと思った。

健康な彼女。健康な彼女の歯。

それだけで、世界は輝く。

列車の外はいちめん、青空の下の大地に広がる緑の果樹園だった。

オレンジとレモン、オレンジとレモン、オレンジとオレンジとレモンとレモンと……

「オレンジとレモンが一つの木からぶら下がってるように見えてきた」ぼくがつぶやくと

「同じ木から成ってるじゃない」

「いや、ありえないよ」

「目の前で見ても？ ほら」

確かに果樹園の木からは、レモンとオレンジとグレープフルーツが同時にもっさり成っていた。

「カクテルツリーっていうのよ。接ぎ木すればできるの」

「なんだか、楽園ばいね」ぼくが感心すると

「休日は楽園に行こうって言ったのは、あなたよ」

麗は笑って、今度は克蘭ベリーを唇にはさんだ。

「あつちについたら、何をしようか」

「なおきはいつも、一日の予定を立てるのが好きね」

「そう、……かな」

「きょうはあれをしよう、これをしよう。家にいるときでも、裏庭に花を植えよう、一緒に木のベンチを掘ろう、小鳥の餌を切ろう、オレンジがいいかなりんごがいいかな、午後は何をしよう……」

「いじめるなよ」ぼくは苦笑した。だって、ぼくの予定を聞くときの麗はいつも楽しそうなのだ。

「わたし、木遊びがしたい」

「森でいつもやってる、あれ？」

「森の木は全部覚えてしまったもの」

木遊びは、麗の好きな遊びだ。天気の良い日によく二人でやった。一人が木を探す役、一人が案内役だ。探すほうに目隠しをさせ、案内役はその体をぐるぐる回す。東西南北がわからなくなったところで、手を取って、森の中に相手を連れてゆく。そして一つの木に触らせる。抱きつき匂いを嗅ぎ、その感触の記憶で木を覚えさせる。またぐるぐるぐるぐる回して、その場から離れさせる。

適当なところで相手の目隠しを取り、開放する。解放されたほうは、森へ戻り、においと、手触りと、大きさの記憶を頼りに、さっきの木を見つけ出すのだ。

ぼくは木を見つけるのが下手で、麗は上手だった。最初の覚え方がうまいのだろう。そっと木を撫でるようにし、そして両手で抱え、頬をつけ、唇をつけ、全身を摺り寄せてまるで恋する相手のように木を覚える仕草を見ると、ぼくは変な嫉妬を覚えたものだ。

「そんなに熱心に覚えなくてもいいんじゃない」ぼくが言うと

「熱心にしなければゲームにならないわ」麗は笑いながら答える。

「森の木々はみんなひそかにきみに恋してると思うよ。そんな風にきちんと覚えてもらえて」

「もう、相当誘われてるのよ。月夜の晩なんて、あなたが隣に寝てるのに、窓をたたいて誘うの。こっちのほうがいいだろう、こっち

へおいでって」

すまして麗は答えた。

「いつもそうだもんな、あいつら。家の周り中、ライバルだらけだ」
「あなたがいつ森の妖精にさらわれてなにかの木にされても、わたしはちゃんと見つけ出せるからね」麗は得意そうに言った。

そして大きなバスケットの蓋をあけると、中を覗き始めた。

「お弁当も作ったの。あつちについたら、食べましょう。サンドイツチは、なにがいい？ ハムチーズ、アボカドとえび、たまごと豆、パプリカとチキン……」

「あつつ」ぼくは突然の痛みで顔をしかめた。

「痛むの？」

「うん、足がね。なんかね、なんだろ」

麗は悲しそうな顔をした。

「そんな顔しないでいいよ、大したことないから」

また列車が鉄橋に差し掛かる。

ががながん、ががながん、の音の合間にあの声が聞こえないかと耳を澄ます。音は当たり中に反響して、あらゆる音を吸収し、蹴散らかし、破壊し脅かしそして放出する。ぼくを呼ぶ誰かの声が聞こえる気がする。耳からか、記憶の中からか、よくわからない。

麗はとても不安そうな目でぼくを見ると、細い指でそつと足をさすった。

彼女の指はいつも眠気を誘う。さすられているうちに、ぼくは頭がぼんやりしてきた。鉄橋を渡り終え、がたんごとんというのんびりしたリズムに戻った列車の音が何か楽隊の太鼓の音に聞こえはじめて、ぼくはあわてて眠気を払うように言った。

「きみは、そこにいるよね？」

「なんで？ 目の前にいるじゃない」

「目が重い、どうしようもなく重い。でも、眠ったらいけない。そんな気がする。」

麗はじつとこちらを見ている。

「眠いの？ なおき」その声は、どこか悲しそうだった。
「うん、きみはそこにいるよね？ 起きても、いるよね？」
「あなたが戻ってくるならね」
「どうやったらここに帰れる？」
なにか彼女が答えているけれど、もううまく聞き取れない。
眠い、全身が沈み込むように眠い。どこかへいってしまおう。どこかへ……

どうして泣いてる？ うらら。ぼくは眠るだけなんだろう？
だめだ、もう言葉が出ない。

麗は俯いて、ドライフルーツをまた口に入れようとした。

そして、やめた。

歌を歌いだした。

星に願いを……

あの日の雪は美しかったね、ぼくときみが出逢った最初の冬。あの雪原。

赤頭巾のきみが歌っていた、あの美しい旋律。

迷ったら、あそこへ行くよ。そして一から出逢い直そう。

駆け寄ってきた茶色の子犬を抱き上げて、きみに手渡そう。

何度でもやり直せる。何度でもぼくはいく、君のほとりへ。

麗はじつとぼくを見ている。白い指がぼくに向かって伸ばされる。

きみの指、きみの愛しい指。

頬に触れるか触れないかのその時、かすかな声が最後に響いた。

さよなら、なおき。

だいすきななおき。

また、会いましょう。

星に願いを（後書き）

まず、この作品が不親切で不完全なものであることをお詫びせねばなりません。

このストーリーは主人公二人の現実的なドラマがあつてのアナザーストーリーです。が、そつちのドラマは事情があつてネット上では公開できないので、これ自体が独立して話として成立しているかどうかの判断が問われました。一応、本読みさんに下読みしてもらいわかるかどうかおたずねしたところ、これはこれで成立していると思つたので、いったん公表することにしました。でないと、開かれた置き場所がどこにもなかったのです。実験的に公開しましたが、（削除は最近間違つてしたので運営に負担をかけますし）あとで非公開設定にするかもしれません。

事情については、活動報告のほうをよろしければご覧ください。

> i28647 — 1094 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3575v/>

彼女の森

2011年8月6日08時59分発行